



インド太平洋の歴史をつなぐ

秋田茂

本書は、第一次世界大戦が勃発した前後の「帝国の時代」に、日本船の駒形丸を利用してカナダへの移民を試みた、インド系シク教徒たちの試練の物語を通じて、約百年前の「インド太平洋世界」と日本の関係を描いている。現代の日本政府が掲げる国家戦略としての「自由で開かれたインド太平洋」には、それを裏づける歴史的な実態があった。モノ、ヒト、カネ、情報のやりとりを通じたグローバル化の進展と、新たな活躍の舞台を自らの力で切り開こうとした人々の姿を多面的に描こうと努めた。

本書では、ローカル（地方）・ナショナル（国家）・リージョナル（広域の地域）・グローバル（地球世界）の四つの位層で、相互の結びつきを解明するグローバルヒストリーの手法を使つて、「駒形丸事件」の全貌を描き出す。ローカルは、バンクーバー、香港、神戸、コルカタといった港湾都市、ナショナルとは、完全な国家ではないものも含まれるが、カナダ、英領インド、イギリス、アメリカ合衆国、日本などである。さらにリージョナルとは「インド太平洋世界」であり、グローバルとは、イギリス帝国が世界に張りめぐらした種々のネットワーク、イ

ンド人移民の海外ネットワーク、人種意識のような思想的つながりである。これらを通じて、徹底した「つながる歴史」、関係史を追究している。

イギリス政府は、世界最大の帝国支配の正当性を主張する論拠として、「帝国臣民」の論理を掲げていた。パスポートが存在しない時代に、地理的移動や定住の自由を保証し、移民に寛容であったこの原理は、世界帝国を自認したイギリス帝国の誇りであった。それは、他の列強諸国や新興の日本帝国には見られない、多民族支配を安定的に行うための不可欠の統治原理であった。だが、南アフリカでのM・ガンディーの行動に見られたように、支配される人々も、自己の利益追求のために、「帝国臣民」の論理を積極的に活用することができた。

他方で、帝国からの自立、国民国家の確立を目指したカナダ連邦は、独自の国境管理と白人優先の移民政策を掲げて、アジア系移民の排斥に乗り出した。二〇二〇年のコロナ禍により再び、世界的規模でのヒトの移動が劇的に制約されて、世界中が「鎖国」状態に陥っている現状と比較すると、「帝国臣民」の権利を論拠として、人々が自由に移動・定住できた「帝国の時

代」の特異性・独自性を、私たちはより明確に認識できる。

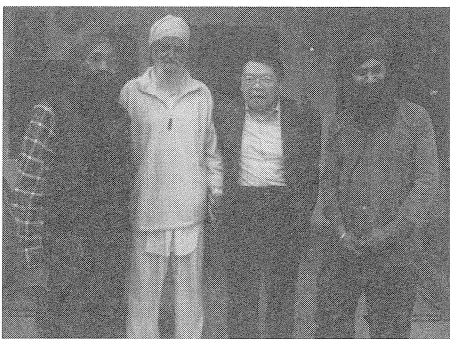
本書は、現代の諸課題とも関連がある。二〇一六年五月にカナダ連邦議会下院で、トルドー首相は「駒形丸事件」に対して謝罪表明を行った。「駒形丸事件」は、ローカルからナショナル

へと歴史の記憶のありようが変化すると同時に、多民族・多文化共存をめざすカナダの恥ずべき過去として、あるいは、インドが自由を獲得し、帝国支配から脱却していく過程で起きた重要な事件としてとらえられるようになった。今日、世界各地で差別や過去の植民地支配に対して「謝罪」や

活発になっている。

筆者は二〇一六年の年末に、「駒形丸事件」に関する現地取材と称して、コルカタ郊外のバッジ・バッジの追悼記念碑を訪れ、現地のシク教徒の古老から「駒形丸事件」への思いを聞く機会があった。現地のシク教寺院は、「駒形丸事件」に関する書籍を英語とパンジャブ語で出版するとともに、内部には、犠牲者を追悼するタペストリーが掲げてあった。今なお親日的な彼らの日本に対する心象と期待感、過去に真摯に向き合つて相互理解を深めることの大切さを示してくれる。

（あきた・しげる イギリス帝国史）



バッジ・バッジ郊外のシク教寺院で古老と共に（秋田撮影）

「和解」を求める動きが

ちくま新書

駒形丸事件

——インド太平洋世界とイギリス帝国

秋田茂／細川道久著

860円＋税